

2017年度 南種子町郷土館 年報



南 種 子 町 郷 土 館

鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2420-2

TEL (0997) 26-1111

目 次

館 沿 革	1
館 日 誌	2
1. 施設の防火設備及び危難経路	4
2. 事 業	5
①展 示	5
②展示の概略	7
③企画展	7
④資料収集活動	8
⑤新収蔵資料	8
3. 教育普及活動	9
■職場体験	9
■体験学習	9
①勾玉づくり体験教室（中平小学校5年生）	9
②ヤコウガイのアクセサリーづくり体験学習	10
③勾玉づくり体験学習（広田遺跡ミュージアム出向）	10
④夏休み企画「昔の遊び道具づくり体験教室」	11
⑤南種子町埋文化財センター体験学習室（体験学習活動調べ）	12
⑥南種子町埋文化財センター体験学習内容（体験学習内容）	12
4. 入館者数	16
5. 郷土館の組織	17
6. 研究論文	18
「松寿院の安政川直しの碑と水天之碑」が文化財指定に至るまでの経緯 （前）南種子町文化財保護審議委員（長田 泰生）	18

南種子町郷土館の沿革

- 昭和44年 2月28日：町立博物館設置準備委員を委嘱
- 昭和44年 3月 7日：第1回町立博物館設置準備委員会
- 昭和44年 3月25日：資料収集協力員と準備委員との合同会
- 昭和44年 4月14日：第2回町立博物館設置準備委員会
- 昭和44年 5月16日：第3回町立博物館設置準備委員会
- 昭和44年 6月 7日：第4回町立博物館設置準備委員会
- 昭和44年 9月13日：第5回町立博物館設置準備委員会
- 昭和44年11月 1日：旧ユースホステルの1室を使用し、「南種子町立南島民俗博物館」
として開館。
- 昭和44年11月17日：第6回町立博物館設置準備委員会（最終）
- 昭和61年 3月 5日：「南種子郷土館」として開館
- 平成19年 2月 1日：旧郷土館の老朽化に伴い、旧公立種子島病院跡に一時移転して
開館
- 平成21年 4月30日：広田遺跡展示室改修工事
- 平成24年 4月 1日：社会教育課とともに、郷土館も旧南種子高等学校跡（南種子町
中央公民館に改名）に移転して開館
- 平成28年 4月 1日：社会教育課が本庁舎へ移転、郷土館の事務所と上中児童クラブ
が併設

館日誌

- H29.
- 4. 4 町埋蔵文財センターが開館
 - 5. 2 島間小学校（3～4年生）来館
 - 5. 3 郷土館との協賛事業 ゴールデンウィーク イベント「昔の子供の～5 遊び体験」を広田遺跡ミュージアムで開催（4日は指導者として、広田遺跡ミュージアムへ出向）
 - 5. 17 勾玉づくり体験教室指導（指導者として広田遺跡ミュージアムへ出向）
 - 5. 17 紙勾玉づくり体験学習指導（上中児童クラブ）
 - 5. 19 南種子町文化財保護審議委員会・郷土館・広田遺跡ミュージアム管理委員会
 - 5. 25 南種子中学校（2名）職場体験受入
 - 6. 1 中平小学校（5年生）勾玉づくり体験学習指導（指導者として自然の家へ出向）
 - 6. 9 「ウミガメ」パネル展示
 - 6.15 4校合同宿泊学習ヤコウガイのアクセサリーづくり体験学習指導（指導者として自然の家へ出向）
 - 6. 28 花峰小学校見学
 - 7. 8 中平小学校（4年生）勾玉づくり体験学習指導（指導者として広田遺跡ミュージアムへ出向）
 - 7. 9 愛知県飛島村ライオンズクラブ来館
 - 8. 16 文化庁調査官来館（西之本国寺盆踊の調査）
 - 8. 23 勾玉づくり体験教室指導（指導者として広田遺跡ミュージアムへ出向）
 - 8. 26 森越功氏資料収集（寄贈者：森越マヤ氏）
 - 8. 29 日高稔典氏資料収集（寄贈者：日高聖雄氏）
 - 10. 15 旧平山中学校同窓会来館
 - 10. 18 勾玉づくり体験教室指導（指導者として広田遺跡ミュージアムへ出向）
 - 11. 3 「宝満池の鴨突き網猟」パネル展示
 - 11. 25 赤米サミット「赤米染めワークショップ」開催
 - 12. 12 町包括センター「介護者交流会」来館
 - 12. 25 愛知県飛島村友好都市交流団来館

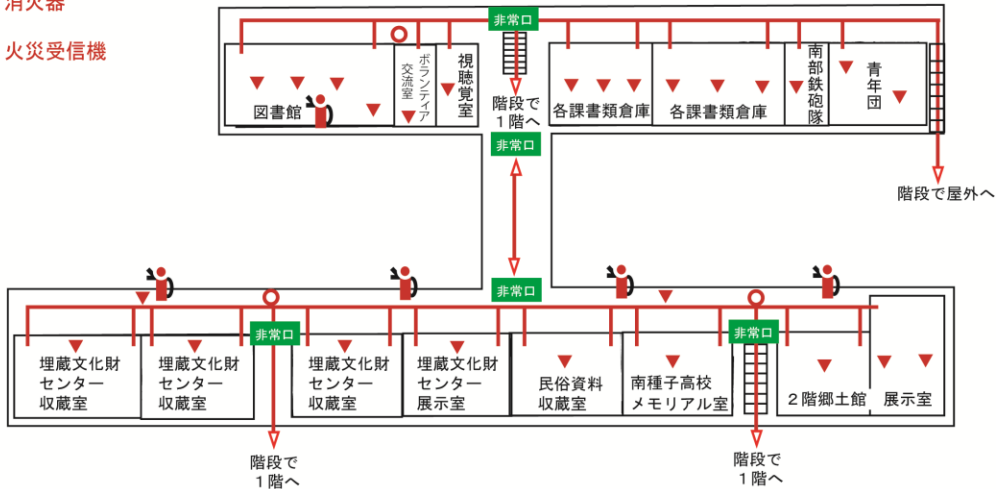
- H30.
1. 25 町立長谷小学校来館
 1. 26 第4回民謡大会開催
 2. 13 第2回南種子町インギー鶏育種会総会開催
 2. 18 「砂糖すめ」パネル展示
 2. 21 新生活ガイド「めっかりもうさん」作成
 2. 23 県指定文化財「南種子町のインギー鶏」認定調査
 3. 11 県指定文化財「南種子町のインギー鶏」品評会開催

1. 施設の防火設備及び避難経路

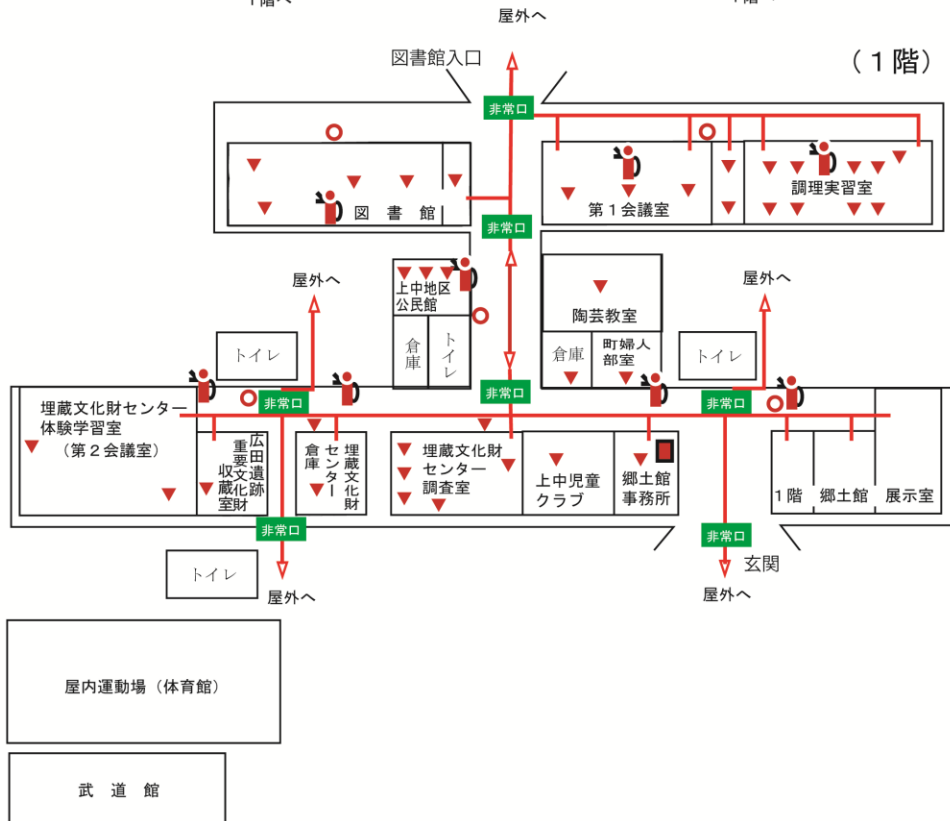
■南種子町 郷土館 中央公民館 の防火設備及び避難経路

- 火災報知機
- ▼ 煙・熱等の感知器
- 🚒 消火器
- 火災受信機

(2階)



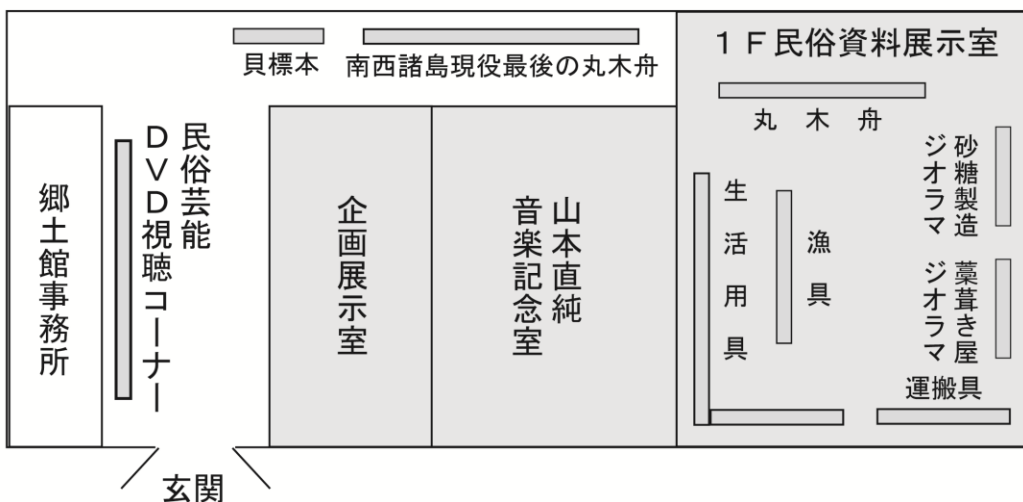
(1階)



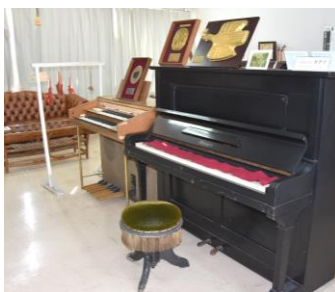
2. 事業

① 展示

1階 展示室



1階民俗展示室（生活用具）



山本直純音楽記念室

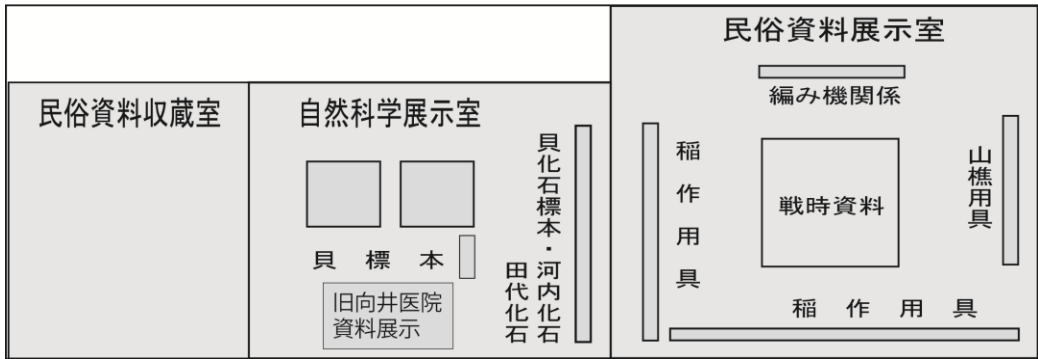


1階廊下展示
南西諸島現役最後の丸木舟



1階廊下展示（過去の企画展より）
「砂糖すめ（砂糖づくり）」のパネル展示

2階 展示室



2階民俗展示室（稲作用具）



2階民俗展示室
（戦時資料）



2階民俗展示室（山樵用具）



2階自然科学展示室（貝化石標本）

②展示の概略

■民俗展示室（1階）

住まいに関する生活用具を中心に展示。

壁面や空スペースを利用して、丸木舟や馬車などの大型資料も展示しています。丸木舟（刳舟）については、通常のもの、隣接する廊下に南西諸島において現役で最後まで使用していた丸木舟（牛野春芳氏寄贈）とを比較展示することで、それぞれの歴史や生活感の違いを感じて欲しいとのねらいがあります。

今年度は、常設展示室の整備ということで、壁板の張り替えや展示台マットの張り替えなどを行いながら、展示資料の整理も行いました。

■山本直純記念室（1階）

山本直純氏愛用の楽器・オーディオ機器・レコード・盾・賞状などの寄贈品を展示。また、山本直純氏との交流のきっかけとなったイベント「トンミーフェスティバル」についてもパネルで紹介しています。今年度は、寄贈カセットテープを一部CD化しました。

■企画展示室（1階）

今年度は、「平成28年度新収蔵資料展」・「様々な畜力労働で活躍した馬の鞍展」・「山本直純展」を開催しました。写真は、「様々な畜力労働で活躍した馬の鞍展」の様子です。

■廊下展示版（1階）

1階廊下の窓枠に展示板を設置し、過去の企画展のパネル展示を行いました。写真は毎年11月15日～翌年2月15日の猟期間に行われている県指定文化財「宝満池の鴨突き網猟」のパネル展示です。

■民俗展示室（2階）

稲作用具を中心とする農具や山で使用する山樵用具等を展示。

また、展示スペースの問題で、軍服・勲章・遺書などの戦時資料等も、同室に展示しています。

■自然科学展示室（2階）

今から1600万年前の河内貝化石群や500万年前の田代化石をはじめとする貝の化石標本を展示しています。また、併せて、種子島で採集した貝の標本も展示しています。

③企画展

今年度は、郷土館と町埋蔵文化財センター業務との兼務ということで、企画展の代わりに埋蔵文化財体験学習室活用のための体験学習を実施しました。（詳細については、教育普及活動の体験学習のコーナーに記載）

④資料収集活動

今後も町の広報紙での呼びかけや文化財保護審議委員からの情報提供をお願いしながら、資料の収集活動を行っていきます。現在、2階の「自然科学室」の半室を民俗資料の収蔵室として活用しています。

⑤新収蔵資料（平成29年度）

提供者	住所	資料名（個数）
森越 マヤ	鹿児島	糸巻（1）・ジザーギ（1）・木製小箱（1）・柱時計（1） 宇宙開発の話題綴り（1）・複製種子島家譜（2）・仏具 花瓶（2）民謡他カセットテープ（3箱）元参議院議員「金 丸三郎」書（1）・土産品「陣笠」（1）・油絵（4） *森越医院関係 診察イス（1）・患者用イス（2）・新生児用ベッド（1） 煮沸消毒器（2）・消毒ガーゼ入れ（2）・消毒手洗い器 （2）・消毒手洗い器スタンド（1）・使用済みガーゼ及び 汚物入れ（1）・点滴スタンド（1）・往診カバン（1）・木 製カルテ入れ（1）・診療規定看板（1）・フラスコ（1）
日高 聖雄	鹿児島	郷土民謡録音テープ（5）・郷土民謡録音カセットテープ （5）・民俗郷土芸能資料（1式）・米サミットビデオテー プ（2）・種子島の方言に関する資料（1式）・インギー鶏 に関する資料（1式）・南種子山林自由労働組合関係資料（1 式）・役場関係資料（1式）・農協関係資料（1式）・南種子 高校関係資料（1式）・南種子町内水面漁業振興会関係資料 （1式）・南種子町温泉調査報告書（1）・離島民友新聞（1 式）・荃永尋常小学校「理科教授之研究」（1）・水稲増収競 技会他賞状（7）・鮫島義一郎「百姓譜」関係資料（1式）・種 子島家譜（1式）・羽生氏家譜目録（1式）・明治百年史年表（1） 種子島鉄砲伝来その歴史と謎（1）南種子町郷土誌 1960 年（1）・島間沿革史（1）・屋久島の民具報告書（1）
日高 聖雄	鹿児島	南西諸島の糖業（1）・戦没画家及び無言館関係資料（1式） *戦没画家「日高安典氏」関係資料 絵画（3）・東京美術学校受験票（1）・東京美術学校身 分証明書（1）

3. 教育普及活動

■職場体験

平成29年5月25日、午前中だけでしたが、南種子中学校2年生2名の皆さんが、郷土館の職場体験に来られました。この日は郷土館の資料整理日ということで、1階民俗資料展示室の資料整理を手伝っていただきました。また、展示資料のふき掃除をしながら展示の方法についても学習しました。そして、最後に郷土館の体験学習「竹鉄砲づくり」を行い、遊び体験用のサンプルを作ってもらいました。



資料のチェック



竹鉄砲サンプル作り

■体験学習

① 勾玉づくり体験学習「中平小学校（5年生）」（平成29年6月1日）

平成29年6月1日、町立中平小5年生の宿泊学習の中で、今年度も勾玉づくり体験学習の講師として、製作の指導を行いました。最初に勾玉について、少し話をした後、製作に入りました。勾玉づくりは、自分が納得できるまで、唯ひたすらサンドペーパーで削っていく、とても根気のいる作業です。形も細身の勾玉から丸っこい勾玉まで、表面の仕上げも傷が気になって一生懸命磨き続ける人から途中で疲れてあきらめる人、様々です。今回は、ヒモの結び方を簡単な方法で行ったため、決められた時間よりも早めに終わることができました。*31名（小学生：25名・引率：6名）



② ヤコウガイのアクセサリーづくり体験学習「町内4校合同宿泊学習」

(平成29年6月15日)

平成29年6月17日、町内の小学校4校(花峰小学校・大川小学校・長谷小学校・西野小学校)の合同宿泊学習ということで、今回はヤコウガイを使ったアクセサリーづくりの講師として、自然の家に出向きました。前の研修時間が伸びて、15分程遅れて始めたこともあって、時間を少し延長していただいて、なんとか完成することができました。



ヤコウガイのアクセサリーづくりは、予めカットされたものをひたすら磨く作業となるので、ある意味、勾玉づくりよりも根気が必要かもしれません。ただ、磨けば磨くほど仕上がりがきれいになるので、それを励みにがんばるように伝えていきます。



* 30名 (小学生：25名・引率：5名)

③ 勾玉づくり体験学習「広田遺跡ミュージアム体験学習出向」(平成29年7月8日)

平成29年7月8日、広田遺跡ミュージアムへ「勾玉づくり体験学習の講師」として、出向きました。今回は中平小学校4年生PTAの主催ということで、児童だけでなく、父兄の皆さんも来られ、子供たちの勾玉づくりを手伝っておられました。中には子供よりも夢中になって、手伝いの範囲を越えて製作されている方も見られました。



* 54名 (小学生：54名)

④夏休み企画「昔の遊び道具づくり体験教室」(平成29年7月20日～8月31日)

今年度は、埋蔵文化財センターの体験学習も兼務で行うこととなり、従来の割りばし鉄砲・ブンブンゴマ・紙ゴマに加え、紙粘土でつくる勾玉づくりや昔の火おこし体験・土器づくりなどの体験教室も開催しました。勾玉づくりは、広田遺跡ミュージアムの体験学習と異なり、紙粘土を使って形をつくり、それを乾燥させて削っていく作業となるので、2回来館してもらうこととなりますが、丁寧に磨くととてもきれいになり、加えて好きな色で着色することもできるので、喜んでおられました。火おこし体験は、なかなか火がつけられず、とても苦労していました。昔の人たちがどれだけ難儀をして「火をおこしていたのか!」を体験できたように思います。また、土器づくりにしても、粘土を積み上げて形を整えるときに拵がり過ぎて皿のようになつたり、崩れてしまって何度も作り直す人もいました。



ブンブンゴマづくり



割りばし鉄砲づくり



紙粘土勾玉づくり



土器づくり



火おこし体験

⑤南種子町埋蔵文化財センター体験学習室（体験学習活動調べ）

月	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	一般	計	町内	島内	島外
4月合計	1	7				1	9	9		
5月合計	2	54				7	63	63		
6月合計		52				10	62	62		
7月合計		38				3	41	41		
8月合計	2	35	5			4	46	42		4
9月合計	2	16				4	22	22		
10月合計	1	12				1	14	14		
11月合計	2	31				5	38	38		
12月合計	1	8				1	10	8	2	
1月合計		15					15	15		
2月合計		40				7	47	47		
3月合計	1	6				1	8	8		
計	12	314	5	0	0	44	375	369	2	4

⑥埋蔵文化財センター体験学習室（体験学習内容）

***割りばし鉄砲づくり**

割りばし鉄砲は、割りばしと輪ゴムを使って鉄砲をつくり、輪ゴムを飛ばす昔の子供の遊び道具です。本町、南種子町は1543年（天文12年）、明国船（ポルトガル船籍）が漂着し、乗っていたポルトガル人から鉄砲が伝わったという歴史的背景もあることから、その史実も伝えながら割りばし鉄砲づくりを行っています。

銃砲の長さを長くすることで、よりスピードや威力がつきますが、コントロールは少し難しくなります。また、輪ゴムを掛けた時にすぐに飛んでしまう場合は、引き金に暴発？防止の輪ゴムを取り付けます。銃口には、カッターで溝を掘って輪ゴムを掛ける方法と十字型になるように輪ゴムで取り付け、輪ゴムを掛ける方法がありますが、体験学習では、怪我をしないように、後者の十字型にしています。さらに、鉄砲に自分の好きな色を塗って、楽しむ子供たちもいます。

製作後は厚紙でつくった恐竜の的をねらって倒し、的につけられた点数を競うゲームも行っています。想いは、古代の恐竜ハンターになったつもりで楽しみます。

* ブンブンゴマづくり

ブンブンゴマは、ダンボールや発泡スチロールに紙を貼った紙パネル板などを丸く切って、中央に2か所穴をあけてヒモを通し、ヒモを引っ張ったり、緩めたりすることでヒモがよじれたり、元に戻ろうとする原理で丸いダンボール板（紙パネル板）を回す昔の遊び道具です。このよじれたヒモが元に戻ろうとする原理は、舞hiri式の火おこし道具の芯棒（摩擦棒）を回す原理と同様であることから、「火おこしの体験学習」を行う際にも紹介しています。

また、ダンボール板に様々な模様や色を塗ることで、コマが回った時にできる微妙な色合いを楽しむこともできます。コマに塗られている色には、健康への願いが込められており、昔は新築や入学のお祝い・5月の節句・結婚式の引き出物などに贈られていたといえます。

* 赤色は心臓の健康・黒色は腎臓の健康・黄色は肝臓の健康・緑色は脾臓・白色は肺の健康を意味するといわれています。

* 紙粘土でつくる勾玉づくり

広田遺跡ミュージアムでは滑石という軟らかい石を紙ヤスリで削って勾玉づくりを行いますが、埋蔵文化財センターの体験学習では、まず紙粘土で勾玉の形をつくり、それを乾燥させてから紙ヤスリで表面を磨いていく方法で行っています。

勾玉の形づくりは、紙パネルで作った型抜きに紙粘土をつめて抜き取り、整形しますが、型抜きを使用せず、自分で作る人もいます。

その後、2～3日乾燥させて着色し、（着色したくない人には、防水のため、透明マニキュアやニスなどで表面をコーティングすることを勧めています）ヒモを取り付けて首飾りにします。

今回は固めた紙粘土を、勾玉の形に削ってつくる方法でも行ってみたいと思っています。この製作方法の方が、古代の勾玉の製作方法に近いと思われるからです。

* 火おこし体験

昔の人がどのようにして、火をおこしていたかを簡単に説明をした後、キリモミ式と舞hiri式の火おこし道具を使って火をおこし体験学習を行いました。

舞hiri式火おこしの芯棒が回転する原理が、昔の子供の遊び「ブンブンゴマ」の回転と同じであることを説明しようと思いましたが、ある子供から「なんかブンブンゴマ」に似ているなあという意見が聞かれました。昨年の夏休みに昔の遊び道具づくりで、ブンブンゴマをつくったことを思い出したのでしょうか！子供の感性はすごいなあと感心しました。残念ながら、火をおこすことはできませんでしたが、逆に昔の人は「こんなに苦労をして火をおこしていたのか！」ということがわかってもらえてよかったのかもしれない。

***土器作り**

縄文時代になり土器がつくられるようになると、縄文人の食生活は煮込み料理や汁物なども作られるようになり、とてもバラエティー豊かになりました。縄文人たちの土器づくりに対する「あつい思い」を感じながら、体験学習を行いました。

土器づくりでは、まず、器の底をつくり、その上に粘土を紐状に伸ばしたものを積み重ねて行く「紐作り製法」で作りました。粘土を積み上げて整形する際、広がり過ぎて皿状になって崩れてしまって、何度も作り直す人もいました。また、ヘラで模様をつけたり、星やハートの形に作ったものを土器の胴部にくっ付けている人もおり、それぞれこだわりを持って作っていました。

***貝殻アートアクセサリーづくり**

以前、広田遺跡ミュージアムで行っていた体験学習で、まだ材料が残っているということで、こちらの体験学習で使用してみました。

水を入れた紙コップに数種類の色のマニキュアを1滴ずつ垂らすと波紋ができ、それをつま楊枝で花のような模様を作り、その中にタカラガイなどの貝殻を入れて、マーブル模様をつけるものです。マニキュアの色や模様の作り方、貝殻の大きさや貝殻を入れる場所によって、それぞれ違った模様になり、自分だけのオリジナルな貝殻アクセサリーができるのが最大の魅力で、人気があります。

貝殻の模様が乾くまでの時間を利用して、貝に取り付けるストラップのヒモを編みます。

***アングン（縄文織機）によるコースターづくり**

アングンは縄文時代の織機で、衣類や物を入れる袋などを麻ひもなどを使って編んでいたようです。体験学習では、実用を兼ねて、お茶やコーヒーカップに下に敷く「コースター」づくりに挑戦しました。子供たちに体験させる前に実際やってみると、1人でヒモを押さえながら編んでいくのは難しく、子供たちには2人1組で体験学習を行いました。

また、マジックで好みの色を着けることによって、写真のように、きれいでオリジナルなコースターを作ることができました。

***勾玉チョコづくり**

前回、紙粘土による勾玉づくりを行いました。今回はバレンタインDAY時期ということで、広田遺跡ミュージアムから「勾玉の食品用型枠」をお借りして、勾玉チョコづくりを計画してみました。市販のチョコレートを鍋で沸かしたお湯の熱で溶かして、それを勾玉の型枠の中に流して冷蔵庫で固めます。翌日、型枠から取り出して完成です。前回の紙粘土とは違って、「食べられる」ということで、とても喜んでいましたが、実際作ってみると、お家の人たちにも見せたいということで、皆さん家に持って帰りました。

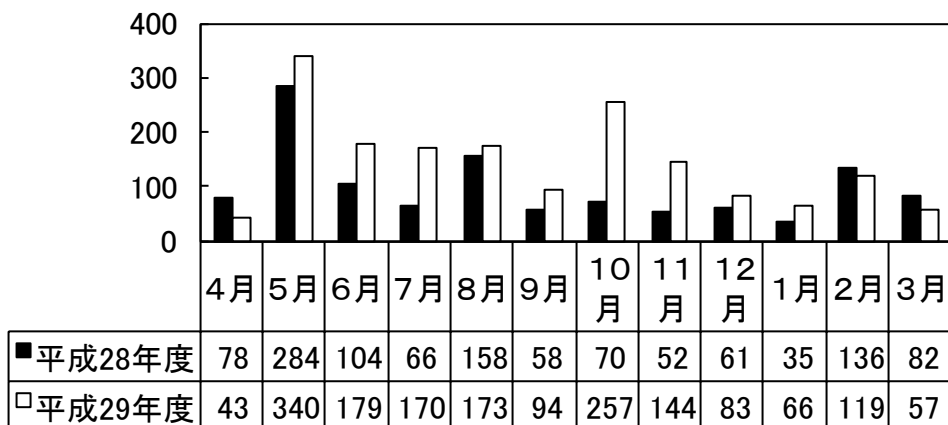
4. 入館者数

平成29年度 南種子町郷土館入館者数調査

(平成29年4月1日～平成30年3月31日)

分類	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	一般	計	町内	島内	島外
4月	1	7				35	43	33	6	4
5月	14	231	4	1	1	89	340	141	143	56
6月		114			2	63	179	160	3	16
7月		103	4			63	170	119	2	49
8月	2	87	12	2	1	69	173	75	6	92
9月	3	42				49	94	69	5	20
10月	1	29	1	154		72	257	73		184
11月	10	55		8		71	144	109	12	23
12月	1	30	1	1		50	83	51	2	30
1月		28				38	66	50	3	13
2月		61			1	57	119	95	2	22
3月	1	24			2	30	57	40	3	14
計	33	811	22	166	7	686	1,725	1,015	187	523

月別 入館者数の動向(前年度比較)



5. 郷土館の組織

- 館 長 小脇 隆則（社会教育課長）

- 文化係 才川 いずみ（文化係長）
- 学芸員 石堂 和博
- 学芸員 小脇 有希乃

- 管理員 豊島 巧

- 管理員(補) 平島 強

- 管理委員会委員長 長田 忠（文化財保護審議会委員長）

- 管理委員会副委員長 柳田 和則（文化財保護審議会副委員長）

- 管理委員会委員 岩澤 昭文（文化財保護審議会委員）

- 管理委員会委員 日高 友典（文化財保護審議会委員）

- 管理委員会委員 稗島 悦郎（文化財保護審議会委員）

6. 研究論文

「松寿院の安政川直しの碑と水天之碑」が文化財指定に至るまでの経緯

(前) 南種子町文化財保護審議委員 長田泰生

はじめに

この安政川（新川）はガサメ（ガサミ）が良く捕れるものですから、カニ籠を入れる為に頻繁に通っていました。小学生の頃、あの寡黙な父から1～2回、昔、松寿院と言う偉い女の殿様がいたと聞かされて、何故か耳にこびりついてました。護岸工事で、やり場に困ったのでしょうか。道端に無造作に、しかも元あった反対側に横倒しになって、溝に水漬している石碑を見ながら「どうにかならんものか」と思って居りました。平成9年、地区公民館長に就任してから、教育委員会に整備をお願いしました。予算がないので、取り敢えず2名の臨時職員の手を借りて「水天之碑」を引き上げて現在の位置に据え付けました。その後、周囲にブロックを築き、土手の崩れるのを防いだが、草木が茂るので平成20年11月、当局の理解の下、石堂さんを中心に作業員を含め4名で、コンクリートで固めました。私は平成15年4月に南種子町文化財保護審議委員に任命されてから5年、羽生源志会長指導の下、平成20年4月28日、漸く文化財の指定に至りました。平山からの指定文化財は昭和43年の「座敷舞」「蚕舞」及び昭和47年の「広田石塔祭」「岩穴」「広田遺跡（平成20年国指定）」に続いて、36年振りの快挙です。今後の課題は、松寿院の偉業をいかに伝承するかにかかっています。松寿院様に対して、忸怩たる思いの中にも、若干の安堵を享受しています。

松寿院のかごかま輿丁善四郎に対する誹謗中傷の因を探る

- ①安政6年10月：平山村の善四郎・下中村の平太郎、祖母夫人の輿丁と為りて善く其の職に称ひ且つ薬園の灌培に労あり、ゆえに一世其の課役を免ず。
- ②文久元年（1861）2月：輿丁平山の浅次郎・西之村の周次郎、各々伐明田の租を免ず。善く其の職を奉ずるを以てなり。
- ③文久3年4月：平山村百姓善四郎を以て、代々足軽と為し、氏を盛村と命じ、下々田一所を賜ふ。多年、祖母婦人の輿丁と為るを以てなり。

種子島家譜より抜粋

松寿院の駕籠担ぎ役 浅次郎・善四郎の考察

偉い人が巡行する時は、安全性を優先すると思います。ましてや、島内で一番偉い殿様が駕籠に乗り移動する事となれば、いくら腰の低い殿様であっても随行する家臣の緊張ぶ

りは想像以上だったと考えます。

松寿院は小柄で元気な殿様だった様ですが、長時間駕籠の中に座っているのは相当忍耐力もいるだろうし、疲労もあったと思います。私が10分間ぐらいでも乗ったら、カゴ酔いと言うか、乗り物酔いで吐き気がすると思います。歩く方がはるかに楽です。

下中や莖永の視察もしなければなりません。道も今と比べれば酷く悪かったでしょうから、駕籠を担ぐ人は更に大変です。屈強な若者でないと務まりません。駕籠を担ぐ人は殿様の一番身近にいる訳ですから、素性もしっかりしていて、信頼度の高い者でなければなりません。駕籠担ぎ役の浅次郎は明治41年(1908)74才で没、今から100年前です。従って、1834年に生まれている事になります。安政3年(1856)に役目を仰せつかったとすれば、当時22才だったと考えられます。駕籠担ぎの役目と言っても殿様は頻繁には来てませんので、職業としては成り立ちません。名前からして、百姓の二男であったであろう浅次郎は、現金収入を得難い時代に身を粉にして、この重労働を遂行し、家計を支えたのでしょう。優しい殿様、松寿院は温かい労わりの言葉をかけたことでしょう。それらの行動を遠巻きに見ていた一般の人々は、気高き殿様の浅次郎や後で述べる善四郎のことを羨望の眼差しで見める人もあって、謂れもない風説として流布したのです。

駕籠担ぎ役 浅「善四郎」への中傷

松寿院は、晩年にも島内巡行や視察を精力的に行っています。その一行は家臣やお付きの女性を含めると、相当な人数だったと思われます。大浦川の川直し事業は安政4年(1857)に行われているので、松寿院60才の高齢です。御殿医なる者もいたかもしれないし、緊急状態に備えて馬に乗った人もいたでしょう。その一行の休憩所や宿泊施設が必要です。身辺警護を第一義とし、環境が重要です。三方を小高い山で覆われ、南からの日差しの良く当たる清水の湧き出る絶好の場所に、松寿院の休憩所が建てられた。この場所が森村家の土地でした。現存しているその建物は約150年経っているにも関わらず、威風堂々としており、一見して特別な屋敷だとわかります。森村家の末裔は25年程前に東京に引っ越し廃屋となり、建物の周辺は草や木、竹が繁って人を遠ざけつつある。善四郎達、森村一家は、母屋の裏にある小さな家に居住を許され、管理人の役目を果たしていたのでしょう。

熱心な法華宗の信者である松寿院は、天保9年(1838)42才の時、熊野山に松濤庵を建てている。毎年の様に熊野詣でを重ね、松濤庵を基点として巡視にも力を入れたのでしょう。その滞在に際しては、宝慈院や孫達と同行しているようです。信心深い人柄が偲べれます。松寿院は慶応元年(1865)、69才で亡くなり、やがて明治(1868)となり、休憩所としても必要なくなり、母屋にも居住が許されたのでしょう。この事が^{かまびす}喧

しい村人達の詮議の的となりました。

駕籠担ぎの善四郎と松寿院が怪しい関係にあり、夜の相手も務めたと言う「噂話」をちらほらと聞いた事は事実です。挙句の果ては、熊野の入江に小舟を浮かべて、夜な夜なデートを重ねたと言い出す始末です。私は、この類の話を一蹴します。論議をするのも馬鹿ばかりですが、この際はっきりさせておきたいと思います。冷静に考えなくても、殿様と平民のカゴカキが恋仲になるなんて事は有史以来聞いた事がありません。しかも、松寿院は安政4年には61才の（オーバーチャン）です。事業のことや村人の為になる事を考えて、命を削っているのに失礼な話です。現代も人の功績を正当に評価せず、中傷を振りまく輩が多いです。もしそんな事があるとすれば、警護役の家臣の面子は丸潰れです。下衆の勘繰りで、こう言う風説は腹が立ちます。結論として、断じてあり得ないと声を大にして言いたいです。

松寿院は、善四郎にお尻を押させて丸山に登った？

大浦橋の北の方角、小浦上から流れてくる川向うに添って、標高30m、幅20m（私の推測で、はっきりしません）ぐらいの丸い山があります。松寿院がこの山の頂上から遠メガネ（望遠鏡）で塩田工事の進捗や川直しの様子を観察したという伝説はあります。そして、この山に登る時に、彼の善四郎が松寿院のお尻を押したという説は、色恋沙汰を除けば、確かにロマンがあります。しかし、現場に行ってみれば解りますが、ほぼ垂直に近い岩山で、木は生えてますが、60才のおばあさんが物理的に登れるとは思えません。大浦に住む73才の従姉に聞いて見ましたが、あの山に幼い頃から登ろうとも思わないし、女性が登れる訳がないと断言しました。それより、丸山周辺の田畑などは、従姉の所有地なのに、丸山だけは故、Y. H氏の名義と言う事の方が不思議だと話します。平民が殿様のお尻を押したりしたら、家臣が許しません。万が一、そう言う場面に遭遇したら、重臣ですら時代劇に出て来る様に「殿、御免仕ります」と丁重にお断りを申し上げて、行動を起こすでしょう。ここでも善四郎が登場するのは、殿様の傍らにいる事の多い善四郎を揶揄したのであらうと思われます。

大浦川の北側を小浦上濱（コウラガミバマ）と呼称していたのは正しいか？

向井秋雄氏（82才）の証言

私の曾祖父、麻生清右エ門は、現在地の山を越えた宇都に苦屋（わらぶき）を構えました。海拔0mのその地の道は、大潮のたびに水浸しになり、往来を妨げました。当時は周辺に居を構えていた住人も少なからずおり、勢いのある小集落でした。私の父も、小学生の頃まではその場所から通学しました。小橋を架けて渡っていましたが、祖父、清三は汐

入の心配がない現在地に居を移しました。今でも昔の土地の周辺を家内浜（ヤウチバマ）と呼称し、その区域ごとに何々浜と今でも称しています。松寿院の塩田の場所を、小浦上濱（コウラガミバマ）と呼称していたのは、その通りだと思います。

（１）私は松寿院大浦塩田開発に従事した者の末裔

松寿院の大浦塩田の開発事業

安政3年（1856）6月～文久元年（1861）完成

松寿院60才 ～65才（5ヶ年間）

麻生清右エ門（父方の曾祖母）の碑銘

萬延元年種子島藩主より製塩防川伝指導人に雇傭せられ元出水より大浦塩浜にきたる

（家督を継いだ伯父・麻生信夫の墓碑の原文）

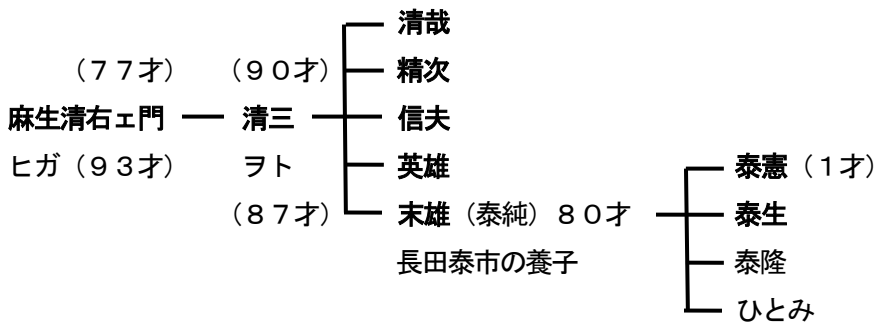
萬延元年（1860年、今から149年前）

種子島藩主（種子島家第23代久道夫人「松寿院」）

防川伝（もとの墓の碑文の写しとりのミス）

雇傭（ある労働に従事させるため、報酬を与えてやとうこと（やとい入れ）

元（国もと・出身地）



◆大浦塩田は、昭和19年3月、先ず小型飛行機により爆弾を投下され、直径数メートルの大穴ができていました。（従兄、山田英三郎の目撃談）

◆昭和24年4月頃、大浦塩田は軍事基地や飛行場と誤認されたのか、B29により大浦の民家（麻生一家）に焼夷弾を投下され、全焼、幸い死傷者はありませんでした。（防空壕のお蔭）全て消失してしまい、辛うじて墓のみが残り、唯一の手がかりとなりました。

(2) 先祖の姓が麻生なのに、なぜ長田姓？

昭和10年に建立された塩田改良記念碑に刻まれています。製塩者の麻生信夫・麻生清哉・麻生精次は私の父の兄達です。つまり、伯父に当たります。全員亡くなっていますが、点印の方々の御存命中を良く覚えています。

さて、先祖の姓が麻生なのに、私は長田姓かと言うと、先の系図の中に塩甲貯蔵所長田泰市という名が出てまいります。私の父方の祖父は2人いるのです。

長田商店初代の長田泰市は子宝に恵まれませんでした。泰市は若くして早稲田大学通信課程を修了し、南種子町で最初に株式会社を立ち上げたり、町議も務め、商売も手広く行い、一代で財を成した伝説の人物です。地域のトップリーダーとして、慈善事業にも力を尽くしたようです。平山神社の鳥居も泰市の厚意で建てられたものです。羽生源志先生の源志の名付け親だそうですが、成る程、名は体を表すと言いますから、源志先生を拝見してますと、立派な名前だと思つづく思う今日この頃です。

①軍部の台頭の状況下における後とり養子

子供のいなかった泰市の後とり養子として、いとこと言う事もあり、私の父に白羽の矢が立ち、学資の面倒を見てもらい、鹿児島実業の商業科を卒業し山形屋に入社したのですが、昭和6年、中国奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道を爆破した柳条湖事件、これを中国軍のしわざとして軍事行動し、満州事変が勃発、昭和7年には海軍青年将校の一団が、犬養毅首相を射殺した五・一五事件、北一輝の思想的影響を受けていた皇道派の一部陸軍青年将校が約1400の兵をひきいて、首相官邸・警視庁などを襲った二・二六事件、そして北京郊外の盧溝橋事件を契機に日中戦争へと発展して行く時世では商売どころではなかったようで、父は昭和 年、20才の時、日本帝国陸軍憲兵学校の試験に合格し、職業軍人としての道を歩み始めました。

東京中野区に学校があったので、あの有名な某報道機関のあった憲兵学校の出身者には間違いないけど、特務機関員ではなかったようです。憲兵科に入るのは難関と言われていたそうで、思想は勿論の事、体格・血液型まで調べ上げた上での合格だったようです。確かに父はAB型でした。何の科学的根拠があったかはわかりません。因みに私の兄弟・私の子供・孫にもAB型は出てきません。私を含めて大半があの評判の悪いB型です。母がそうでした。

父は中支派遣を経て朝鮮(ピョンヤン)で終戦となり、母より先に引き揚げてきたそうです。母は引き揚げの途中、長男、泰憲が、はしかに罹り、遺骨を抱いて失意のどん底で祈祷したのです。直属の上司、稲田という小隊長は責任を一身に負い、服毒自殺をしたそうです。戦犯容疑者の逮捕が進められる中で、父も気にしているように感じました。父の

名誉のために申しておきます。映画などで見る憲兵は極悪人みたいに扱われていますが、決してそうではなく、軍の綱紀肅正をはかるべく、組織であった事は事実です。敗戦後、自作農創設特別措置法による第二次農地改革により、祖父、泰市が築いた財産もほとんどなくなりましたが、父母は昭和22年、現在地に長田商店を再興したのです。

(3) 大浦塩田の終焉

①私の母方の祖母の妹、崎田チヨは女子2名を授かったのですが、男子に恵まれませんでした。下中出身のS・S氏を長女の婿養子として迎え入れました。S・S氏の兄さんは、上中で開業していたS川医者です。私の祖父の泰市が遠縁に当たることもあり、S川医者が医学生の際、学資の援助をしていたと母が話しておりました。S・S氏は戦後、西之表の専売局に勤めており、当時は専売品だった防虫剤や医薬に使う樟脳をとる為、利便性の良い父の山林の木を伐採し、そのもととなる「クスノキ」の植林事業を展開しましたが、時代にも、生育環境にも合わず、事業は大失敗でした。10町歩程あるのですが、1本も残っていません。

大浦塩田は政府の統制下であり、部局は専売局です。昭和27～8年頃になると、外国からの塩の輸入によりその存在価値が薄れて行きました。それどころか、赤字続きで大変なお荷物でした。

②ここで、再びS・S氏の登場です。昭和30年頃、S・S氏から政府統制下のもと、専売局から民間へ払い下げる事になり、その価値が80万円だと言う事で、40万円は調達できるが、残りの40万円が足りないので協同でどうだろうかという話を持ち込んで来ました。いくら我が家が商売をしていたとは言え、当時40万円もの大金がどこにあったのか不思議でした。母はさりげなく「あん時は、あったとな～ら～」と話していました。S・S氏も月給のサラリーマンが、どう調達したものかと思いました。

③平山では一連の製塩作業を総じて「塩焚き」と称してました。

塩田の砂を掻いて日(太陽)に晒し乾燥させ、塩分濃度の高い砂を「沼井ぬい」に入れ、その上から満ち潮を「堰」というか、溜まり水を注ぎ、更に「濾過ろくわ」させて凝縮した海水を「本釜」に担って汲み入れ、割って乾燥した松などを焚いて煮詰め固体化させ、製塩となし、販売を終えて「塩焚き」事業の成立です。

*沼井(ヌイ):地元ではコミと呼称

④「塩焚き」は夏の日差しの強い時期にのみ営業しました。従業員は、命をかけた重労働です。農業の傍ら現金収入を得ようとする人々は、まだ余裕があるが、「塩焚き人」の中に

は「入り人」も多く、言葉は悪いですが、流れ者もいました。私が小学校1年の頃だったと思うのですが、ふらりとやって来た若者を住まわせて寝食を共にする訳ですので、母は気色が悪いと、いつも「ブツブツ」言っていました。ある日、誰かが巡査が来たという話をしたら、次の日消えてました。

⑤塩田売却

昭和34年、中種子町出身のNさんとBさんがS・S氏を通じて大浦塩田の買収にかかり、営業に行き詰まりを感じていた父は、安価で売却しました。売却契約終了後、まもなく政府（国）から専売局（のちに公社）を通じて手切れ金というか、補償金600万円もの大金が転がり込んできたと聞きました。その時塩田に従事していた従姉が幾ばくかの退職手当を受け取ったと証言しています。その後、製塩事業は行われず、安政4年（1857）から続いた松寿院の大浦塩田は、昭和34年、約100年間の製塩事業の歴史が完全に「終焉」となりました。

（4）大浦塩田跡のその後（現状）

岩崎産業は地域活性化の大義のもと、原野、汐入り、荒廃地などを広範囲にわたり買収しました。その代表格が大浦塩田です。岩崎産業は昭和36年5月、種子屋久航路に屋久島丸を就航させ、飛ぶ鳥を落とすような勢いのある大企業です。地元の有力者の後押しを受け、政治力も身に付けていました。学校には岩崎賞なるものも設立したり、昭和36年には平山小学校へテレビの寄贈もしています。この頃、岩崎与八郎社長自ら、白の上下のスーツにマドロス帽、いわゆる船長さんの姿でした。平山住民は、拍手で持って歓迎しました。土地投機の目的に批判が上がらないようにする手段であったと思われる。

大浦塩田はその後数年間放置され、一向に事業に着手しないことに苦情が出たのか、あの広大な塩田の一部に車エビの稚魚を放流し、養殖事業と銘打ち、矛先を変えました。夜

行性の車エビの密漁を防ぐため、見張り番2名を応変におきました。ガサメもウナギも、うようよいたそうです。台風による豪雨で堤防が決壊し、大半が外の川に逃げました。今は潮水の入替わりも弱くなり、砂浜はへドロ化、マングローブ（メヒルギなど）の群生化が進んでおり、10年も経てば塩田跡地は消滅します。

◆麻生清右ヱ門に対する考察

清右ヱ門は、一般的に防州伝法の指導者、塩田師（製塩技術者）として、出水から松寿院に雇われて来たのであろうと思われませんが、私は違う見解です。

安政6年（1859）、松寿院は塩田拡張を図り、生産増を悲願とし、西村時乗を出向し技術を習得させようとしたのですが、失敗しました。

翌、万延元年（1860）3月、再び西村時乗を出水に派遣して、出水の塩師、慶八・庄次郎来島とあります。塩田師2人には姓がありません。清右ヱ門には姓が許されています。歴史的に見て、大きな違いです。（四民平等の世になり、平民にも苗字が許されたのは明治4年）この塩師2名とその一行で同時期に来島したのは、ゆるぎない事実です。

塩田の大拡張工事は、約1年半の歳月を要しており、費用も1847貫919文・米58石8升6合余とあるので、空前の大工事です。この記録を記帳し報告するのは、几帳面な人物です。任夫及び金銭の出入りも繁雑だったと思われま

す。家督を継いだ伯父の麻生信夫宅には、空襲で全焼するまでは立派な硯や朱の墨、達筆な書類綴りがあったと信夫の妻、シズが話していました。帯刀していた刀は現存します。

これらのことを踏まえ、私の曾祖父、清右ヱ門は、出水出身の事務方の下級武士で、当時22才の若者は、何らかの事情により地元の女性と結婚し、平山の大浦に住み着いたと推察されます。